

東京バッハ合唱団 月報

[第 663 号] 2017 年 9 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 663

September 2017

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

未来への思い出——東京バッハ合唱団

佐治 晴夫 (団友、理論物理学)

マーガレットが咲き乱れる山道を登ってきた小さな赤い郵便車、そして手渡された一通の封筒、それは、今年はじめに刊行した拙著の出版社からのものだった。開けてみると、なんと、大村恵美子氏からの 30 数年ぶりのお便りと東京バッハ合唱団「月報」第 658/659 合併号だった。なつかしさと長らくのご無沙汰を申し訳なく思う気持ちが交錯するなかで、ページをめくると、拙著の紹介文が掲載されていた。連絡先がわからないまま、出版社経由で送付して下さったのだった。筆者のことを覚えていて下さった喜びと感謝で、胸がいっぱいになった。

思えば、1950 年代の後半、大学の教養時代、口短調ミサについて熱く語っておられたバッハ研究の重鎮、辻荘一先生の講義に圧倒され、以来、可愛がっていただいていたが、あるとき、ふとしたきっかけから、当時、イタリアでの研究から帰国されたばかりの戸口幸策先生を紹介されることになった。以来、戸口先生と親交を深め、当時 5 歳くらいだった先生のご子息、純さんの算数のお相手をすることになった。純さんが、思いつくまま、つぎからつぎへと書き上げてくる虫食い算には悩まされたが、そういったお付き合いのなかで、当時、純さんのピアノのお相手をしていた芸大の院生が妻になってしまったという経緯がある。今、考えると、それは戸口先生のひそかなお計らいの結果だったようである。

ちょうどその頃だったのだろうか。大村恵美子氏が主宰する連続シンポジウム第 1 回目の「今、なぜバッハか—その普遍と前衛をめぐって—」に登壇するよう戸口先生からご依頼をうけ、西武百貨店スタジオ 200 へと出向くことになる。東京バッハ合唱団「月報」第 660 号別冊の記録によれば、1981 年 6 月 22 日のことだった。戸口先生の司会で、辻荘一先生、当時、新進気鋭のピアニストだった高橋悠治氏をまじえての熱い対話が展開された。

そのころ、筆者は、理論物理学の一分野である非線形形の統計力学を使った「自然界に内在するゆらぎ」の基礎理論に関心をもっており、音楽の構造を数学的ゆらぎで眺めてみると、とりわけバッハの作品に顕著な特徴があることに気づいていて、そんな話を戸口先生にしていたことから、パネラーに選ばれたものと推

測される。今、思えば、音楽界の大御所を前に冷や汗ものだったが、1977 年、NASA が太陽系・外惑星探査を目的として打ち上げた無人宇宙探査機、ボイジャー 1 号、2 号に、地球外知的生命体 (ET) へのメッセージとして、数学的性質を強く内包するバッハの作品の搭載を提案したこともあって、宇宙の普遍的言語としての数学と音楽という話をしたように記憶している。そのときの模様を論説として、翌年の 1982 年、信濃毎日新聞文化欄に戸口先生がかなりくわしく書いて下さった。その新聞のコピーは今も大切に保管しているが、「バッハ—現代からの照射—普遍的の魅力、多角的に」という表題もいかにも戸口先生らしい口調で、なつかしさがこみ上げる。その戸口先生も昨年春、幽明境を異にされた。先生を生き写しにしたようなご子息、純さんも、今では、ピアニスト、作曲家として国内外でユニークな活動をしておられる。

ところで、当時、私は、戸口先生が教授をしておられた文芸系の大学はじめ、女子大などの非常勤もしていて、物理学、天文学の講義の前には、必ず音楽を聴くという授業をしていた。その音楽のなかから、いくつかを選び、音楽がもつ数学的「ゆらぎ」と、それに加えて、それを聴いている人の脳波測定を行った上で、何か心の糧になりそうな曲目だけを選んで 3 枚の CD をつくることになった。1991 年ころのことである。そのころ、音楽とリラクゼーションとの絡みが世間の話題になっていたこともあり、制作元のポリドールレコードが「α波クラシック」というタイトルを付したのだが、このとき、ポリドールレコードとかかわりを持っておられた東京バッハ合唱団の方がおられた。正確なお名前を失念してしまったことが悔やまれる。

東京バッハ合唱団との直接的、かつ永続的なかわ

月報 9 月号 CONTENTS (増頁・全 6 頁)

野尻湖 2017 報告 [1]

- ・野尻湖 2017 概要 … p. 2
- ・野尻湖合宿に参加して (林 貞敬) … p. 3-4
- ・野尻湖ワークショップ・演奏会はリピーター急増!
(小海 基) … p. 4-5
- ・写真アルバム (撮影/千葉光雄) … p. 3-6
- ・会場アンケート集計 … p. 5-6

りは少なかったが、筆者の心のなかには、あの 1981 年のシンポジウムが大きな影響を残していることは否めない。

今回、図らずも、大村恵美子氏からのお便りをいただき、音楽についてはまったくの素人ではあるが、バッハとの大きな関わりを改めて考えるきっかけとなった。氏に心からの感謝を申し上げたい。そして、約数の数が多いことでめでたいとされている数「60」という創立 60 周年に向けて、東京バッハ合唱団のご活躍が神の祝福のもと、大いなる光となって人々の心を癒し続けることを心から願ってやまない。星移り、年変わり、筆者も 82 歳という馬齢を重ねてきたが、ここ 10 数年、毎朝、必ずバッハの平均律クラヴィア曲集の中の一曲を愛用のピアノで弾くことが日課になってしまった。そこで紡ぎだされる音が、その日の体調を知るバロメーターになっていることを付記して拙稿を閉じたいと思う。

最後までお読みくださったみなさまへの感謝を込めて。

2017 年 8 月、北海道・美宙天文台にて
台長 佐治晴夫



■上掲写真は、ご惠贈の著書「ぼくたちは今日も宇宙を旅している——佐治晴夫のこころの時間」（PHP 研究所、2016 年 9 月刊）に挟んでお送りくださったもの。
写真のウラに、次のようなメッセージを添えていただきました。

大村恵美子様

from 佐治晴夫

久方ぶりのお便りにびっくり致しました。いつも心に留めながら失礼しておりました。辻先生も戸口先生も亡くなり、私も 82 歳で、淋しくなりました。ひょんなことから、今、北海道の山中に小屋をつくり、そこを拠点にして、気分は元気しております。いつれかの日にお目もじできることを願っております。家内は大村先生の後輩にあたり、教授退官後は全国的に新しい音楽療法活動をしております。皆様によろしくお伝え下さい。

2017.5.27

「野尻湖 2017 報告 [1]」

恒例の野尻湖合宿が終了しました。公民館でのワークショップと神山教会でのコンサートという、昨年にひきつづく 2 本立ての企画で、いそがしいながらも、充実した 4 日間を過ごしてきました。

合宿の参加総数は、最大で 38 名、うち先生方 4 名（主宰者、ソリスト 2 名、ピアニスト）で、残り 34 名の中には、釧路在住の後援会員（S1）、山形在住の後援会員（B）とそのご夫人（S2）、ピアニストのご夫君（B）、団員のご夫人（S2）といったスペシャルなゲスト参加も含まれます（文中の S1、S2 などは《ロ短調ミサ曲》での声部。S1 第 1 ソプラノ、S2 第 2 ソプラノ、B バス）。団員のうち 10 名ほどは、神山コンサートの会場から直接のご帰宅となりました。

野尻湖 2017 概要

●公開ワークショップ“日本語でバッハ”

（信濃町ご近所のみなさん、滞在客のみなさんと）

[日時] 8 月 4 日（金）、18:30~20:30

[会場] 野尻湖公民館（信濃町公民館野尻湖支館）

[指導と指揮] 山本悠尋、[ピアノ伴奏] 鈴木真帆

[内容] フィリップ・ニコライのコラールを素材に、バッハの 4 声部合唱のハーモニーを体験。

[仕上げのコンサート]

・合唱：〈目覚めよと呼ばわる 物見の声高し〉 BWV140/1
東京バッハ合唱団

・コラール斉唱：〈物見らの声に〉 BWV140/4

・コラール合唱：〈グロリア 主を讃えん〉 BWV140/7

以上 2 曲は、「野尻湖 2017 祝祭合唱団」（参加者全員）

[一般参加者] 24 名、[団員] 37 名（先生方ふくむ）

[後援] 信濃町教育委員会、信濃町公民館

[協賛] 野尻レイクサイドホテル

●コンサート“湖畔でバッハ”

（東京バッハ合唱団・第 42 回神山教会特別演奏会）

[日時] 8 月 5 日（土）、16:00~17:30

[会場] 神山国際村神山教会（NBA オーディトリウム）

[曲目]

・合唱：カンタータ 187 番《待ち望む みななれを》より

・ピアノ独奏：《最愛の兄に寄せるカプリッチョ》（鈴木真帆）

・合唱：《ロ短調ミサ曲》より：〈キリエ（第 2）〉、〈グローリア〉、〈地に平和〉、〈肉をとりて〉、〈十字架に〉、〈主は甦りたもう〉、〈平和をわれらに〉

[出演]

ソプラノ=二瓶舞子、バリトン=山本悠尋

ピアノ独奏/伴奏=鈴木真帆、合唱=東京バッハ合唱団

指揮/訳詞=大村恵美子

[来場者] 76 名（配布資料残数より推計）

[協力] 野尻湖協会（N L A）

[協賛] 野尻レイクサイドホテル

[両日とも、入場無料]

2017年野尻湖合宿に参加して

林 貞敬（団員）

野尻湖ワークショップ“日本語でバッハ”第1回（昨年8月）を機会に、東京バッハ合唱団は新しい第1歩を踏み出していた。今夏、第2回目が実施され、それを実感した。今年のワークショップ参加者数は昨年の数を倍増したと聞いている。団員以外で24名、団員を含めて参加者数は60名を超えていた。会場は、昨年同様、野尻湖公民館の3階ホール。

昨年の「野尻湖2016祝祭合唱団」（ワークショップ参加者全員を含む合唱団の仮称）に参加された牧野喜（まきの・よしお）さんは、今年の祝祭合唱団にも必ず来られるはずと言って、団員の宮城幸義さんが喜さんのご家族の分も含めてイスを3つ並べて準備していた。第1回と同じようにお父様とお2人でワークショップ開始2分後に来られる、と宮城さんの言う通り、ぴったり2分後に到着された。会場は昨年同様、明るく温かい雰囲気になっていった。

ワークショップには、信濃毎日新聞で見て、孫たちと一緒に聞きに行ってみようというお祖父さまの発案で、お祖母さまにつれられて、幼稚園年長組の妹さんと小学校4年生のお姉さんの姉妹も参加した。はじめは少し戸惑っていたようにも見えたが、団員の橋本隆子さんと藤根律子さんが隣に座って会話しているうちに練習が始まると、妹さんは会場の明るさに引かれて入ってきたたくさんの虫を退治しながら、またお姉さんは、私はピアノを習っていると言って山本悠尋先生の指導に引き込まれていった。お祖母さまは、会場後ろのソファに座って孫たちの歌を聞いておられた。アルトの席におられたお祖父さまの隣には二瓶舞子先生がついてバスパートを歌って下さった。分かれて別々に座っていたご家族4人はワークショップを終えて、また一緒に楽しそうに帰って行かれた。

ワークショップの練習に先立ち、参加者の自己紹介がなされた。今年から行われた新しい情報配信によっ

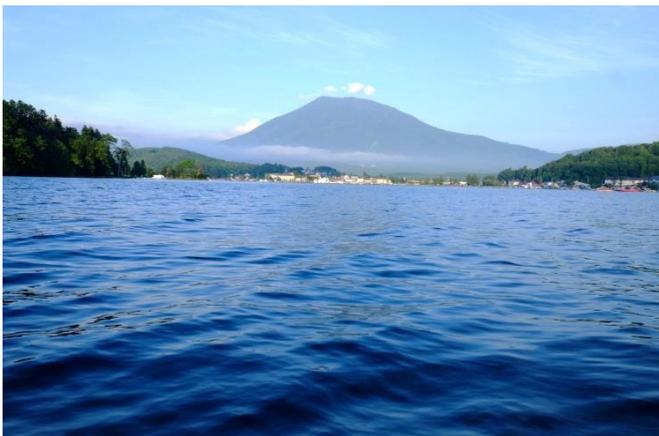
てワークショップの開催を知って来られた方や、昨年からの常連の方はもちろん、今は妙高市に住まいを移された元団員の方まで、色々な方面の方が来られた。

第2回目今回のワークショップのピアノ伴奏者は新婚の鈴木真帆さんだった。団員となられたご夫君・鈴木光雄さんも、もちろん2017祝祭合唱団団員として合唱している。今回の祝祭合唱団の演奏会では、昨年と異なり、演奏する曲が2曲（同コーラルの2つの節）となって充実した。翌日神山教会では行われることになっていた鈴木真帆さんピアノ独奏《最愛の兄に寄せるカプリッチョ》BWV992も、ワークショップに参加したあの2人の姉妹とご祖父母にも是非聞かせてあげたかったが、時間の関係で今回はやむを得ない。

ワークショップ終盤の全員演奏の前に、喜（よしお）さんのお父様に、来年もまたお目に掛かりましょと申し上げたところ、来年のことは分かりません、今回も喜が東京バッハ合唱団のワークショップに行きたいと今日突然言ったのです、と笑顔で誠実にお父様は言われた。バッハが好きかい、とお父様は喜さんに声をかけた。今年は2年目で喜さんもゆったりとリラックスしていた。お父様はワークショップを楽しまれ、今年の新曲〈物見らの声に〉BWV140/4と〈グロリア 主を讃えん〉BWV140/7を、祝祭合唱団団員として昨年と同じ様に立ち上がり、テナーのパートを明るく歌い上げられていた。

今回のワークショップ指導を山本悠尋先生に委ねられていた主宰者の大村恵美子先生は、伴奏者鈴木真帆さんのわきで、譜めくりをさりげなく手伝いながら全体をご覧になっておられた。大村先生からワークショップまとめのスピーチとして、今回このワークショップで、天の御国がここにあるように思える、というお話が意味を持って語られた。ワークショップが開かれるようになって“東京バッハ合唱団は新しく生まれ変わった”ような気がした。

翌日、野尻湖国際村の神山教会（auditorium）で、東京バッハ合唱団・第42回野尻湖特別演奏会が行われた。毎年お世話になっている野尻レイクサイドホテルのご好意で、公民館からのシャトルバス運行も行われ



■「野尻湖写真アルバム」…以下6ページまで、今回合宿のスナップ写真をお届けします。撮影はすべて千葉光雄氏（団員）。



■8/4ワークショップ。山本悠尋先生の指導で、ニコライのコーラル旋律を歌って覚える。野尻湖公民館の3階ホールにて。

た。演奏会場（神山教会）行きのマイクロバスに乗られた初老と中年の2組のご夫婦は、昨日のワークショップはとても楽しかったし、良い雰囲気だったと言われていた。初老のご夫婦は山本悠尋先生のお名前と演奏もご存じで、直接指導を受けることが出来て嬉しかったと言われ、中年の婦人は、国際村神山教会で外国人の方と話すことが出来るなら、文化の違う方と会話してみたいと言っていた。

ソリストとして、昨日のワークショップ指導者の山本悠尋先生（バリトン）に加え、奥さまの二瓶舞子先生（ソプラノ）もお招きしていた。ピアニスト鈴木ご夫妻ともども、こちらも新婚のご夫妻だ。

演奏曲目は、カンタータ《待ち望む みな なれを》BWV187。鈴木真帆先生のピアノ独奏《最愛の兄に寄せるカプリッチョ》BWV992は、団員の室田千晶さんのナレーションを挟みながらストーリーを楽しんだ。10分の休憩の後、《ロ短調ミサ曲》BWV232から7曲を演奏した。例年よりかなり多いお客様を会場に迎えていたと聞いた。

神山教会演奏会を終えて、多くの団員は宿舎に向かうマイクロバスに乗車することになっていたが、黒姫駅に向かう団員と共に私たちはそれに先立って出発することになっていた。会堂外の石段のところで、山本悠尋先生に感謝と再会の約束の握手し、また、ソリストとして演奏してくださり、かつ演奏会場で指揮者譜面台の高さ固定のために苦慮していた団員に気づき、ご自分のために用意されていたバンドエイドを譜面台の固定用にとさりげなく提供してくださった、二瓶舞子先生にも挨拶して、車で野尻湖を後にした。

野尻湖の多くの皆様と先生方と団員と、野尻湖での再会をまた期待したい。

2017年の野尻湖ワークショップ・演奏会はリピーター急増！

小海 基（団員、荻窪教会牧師）

今年の公民館のワークショップと神山教会での演奏会には、去年からのリピーターと新たに加わった参加者であふれかえっていた。従来の「外人村」住民というよりも外からきた来場客の多さに驚かされた。チラシやポスターの効果も絶大であったであろうが、ワークショップで取り上げた曲がカンタータ140番《目覚めよと呼ばわる ものみの声高し》のコーラルであったことも大きかったのではないかな。

ふと耳にしたバッハの音と言葉との出会いがその人の人生全てを支配してしまうような経験となる——そんな出会い方があると思う。バッハ合唱団の中でも私くらいの年齢以上の世代にとって、1969年にただ1度来日したカール・リヒターとミュンヘンバッハ合唱団公演の「ショック」というのは、もの凄いものがあ

る。生でそれを聴いた人はもちろんのことであるが、放送で流れた来日演奏、来日記念盤レコード……のような間接的な出会いであっても、それはバッハの音と共に言葉が「立ち上がってくる」としか言いようのない、これまでの音楽経験ではまず経験したことの無い極め付きの緊張感に満ちたものであった。「この人たちがこういうものを創り出そうとしている原体験とは一体何なのか？」とずっと尾を引き続けて考えさせられてしまうような経験であった。それは私のような素人だけでなく、皆川達夫のような人でも感じたようで、この年の音楽之友社の「レコード芸術」誌6月号に載った「カール・リヒター——バッハ音楽の伝道者」なる有名な皆川のインタビューの中に、次のようなくだりがある。（2016年に河出書房から出された「文藝別冊 KAWADE 夢ムック カール・リヒター生誕90周年記念——不滅のバッハ伝道師」49-63頁に再録され、私も48年ぶりにこのインタビューと再会した！）

——（皆川）まず、リヒターさんとバッハとの出会いから話して頂けませんか。

リヒター（以下R）：私が6つの時だったと思いますが、ラジオ放送でバッハのカンタータ第140番を聴いたのです……。

——有名な《起きよと呼ばわる声あり》ですね。

R：そうです。あのカンタータの中頃に弦楽器がユニゾンで奏する部分【第4曲コーラル：月報編集部】がありましょう。そこに感じられた不思議なメロディの色合い、内面性の音画化といったものに感動したことが一生忘れられないのです。（目をつぶり思い出をたどる表情）

——その感銘がリヒターさんの一生を決定したというわけですね。

R：そう申してよろしいかと思えます。……

ザクセン州ブラウエンの牧師の息子（四男）として生まれたリヒター少年が、11歳でドレスデンの名門・聖十字架合唱団に入団する5年も前のことだ。人生で一番最初にラジオ放送で触れたバッハのカンタータが



■ 朝の練習の前に柔軟体操。無理に曲げないでください。野尻湖のおいしい空気をいっぱい吸い込みましょう。

■ 柔軟体操のさなか、空を見上げると、?! 黒姫の頂上方面から怪異な雲! カメラマン氏は「もう撮りましたよ」とさりげなく、それがこれです。



この140番であったというのだ。そしてこの経験が人生を支配し、リヒターの音楽の方向性も支配してしまう。

今回のワークショップでは、この名曲カンタータの中から美しいアリアやデュエットを除いた骨格の部分、「コラールの王」と称せられるフィリップ・ニコライの3節のコラールメロディーが使われた部分だけの演奏であったが、「3回も立て続けに同じメロディーが繰り返されるだけで、単調になってしまわないのか」という懸念は全くの杞憂に終わった。むしろ同じコラールを用いながらもバッハが実に見事にバラエティー豊かに料理しているかが際立って経験できたと思う。ちょうど宗教改革500年の年でもあり、自国語で歌うと聖書の言葉と出来事がこんなにも「立ち上がって、迫ってくるもの」なのだという宗教改革当時の感動と興奮を追体験できたのが、「自国語上演」にこだわる東京バッハ合唱団ならではのワークショップだったと思う。おそらく6歳のリヒター少年と同じような経験をした参加者が多かったのではないかな。

東京バッハ合唱団がすべきワークショップはこうでなければならないと思う。この経験に出会ってしまった人はもう戻れない。その人生が支配されてしまうのではないかな。生涯バッハの音と共に言葉が「立ち上がってくる」としか言いようのない「演奏」とはどういうものなのかという思いと幻を追うことに支配されてしまうのではないかな。まさにそこにこそ合唱団が「日本語上演」という言葉にこだわり続けてきた意義がはっきりと示されていたように思う。



■ 朝の練習。正面に黒姫山が見えるのですが……。

野尻湖2017 アンケート集計

(1) ワークショップ “日本語でバッハ”

[日時] 8月4日(金)、18:30-20:30

[会場] 野尻湖公民館3階ホール

[指導] 山本悠尋(声楽家)、[伴奏] 鈴木真帆(ピアニスト)

[司会進行] 大村健二(団員)

[内容] カンタータ《目覚めよと呼ばわる》BWV140 中のコラール(フィリップ・ニコライ作、全3節)を素材に、日本語の歌詞による4声部の合唱体験に挑戦。

[参加人数] 24名、[アンケート回答数] 17通。

■ この企画を何でお知りになりましたか?

ポスター	3	NLA 神山ロッジ前、グリーンタウン
チラシ	5	道の駅ふるさと展望館、信濃町教育委員会
新聞・雑誌	2	信濃毎日、カトリック新聞
団からのDM	2	
団のHP	2	
その他	2	通りがかり、知人から

■ どちらからお越しですか?

地元に住居	1	柏原
県内の他市町	3	飯綱町(2)、長野市浅川
他府県	8	愛知、東京(2)、新潟(2)、大阪、神奈川(2)
避暑で滞在中	7	野尻大学村(2)、国際村 NLA
その他		

■ ご来場の交通手段は?

徒歩	1	
自家用車	14	
路線バス		
鉄道		
送迎マイクバス		
その他	2	友人のクルマ

■ ご意見・ご感想をお聞かせください。

- ・楽しいひと時を有難うございました(東京都日野市)。
- ・妻と孫(小4、年長)と、計4人で参加(信濃町柏原)。
- ・すばらしいです。肉声(天使の声!)につられて、歌っておりました。ありがとうございました(東京都品川区)。
- ・野尻湖の静かな場所から、すてきな歌声が聞こえてきました(通りがかり、名古屋市)。
- ・素晴らしいアンサンブルの中に参加させて頂き、楽しい一刻をいただきました。有難うございました(東京都日野市)。
- ・よい勉強になりました。優しくひびいて癒されました(飯綱町)。
- ・とても楽しく参加させていただきました。来年もよろしくお願いたします(横浜市)。
- ・発声練習は、音声生理学・心理学・音響学上の間違いを含んでいる。日本声楽発声学会の学会誌に書いた小生の実践報告「発生の基本(20分の発声練習)」をご覧ください。必要ならコピーをお送りします(長野市浅川)。
- ・このようなワークショップやコンサートを全く存じませんでした。来夏は早く情報をキャッチして、勉強を前もってしていきたいです(大阪府豊中市)。
- ・ありがとうございます。

- ・楽しいひと時でした（神奈川県藤沢市）。
- ・時間内で楽しんで勉強させて頂きました。指導の先生はじめスタッフの皆様のご準備も素晴らしかったです。合唱団の皆様も日頃熱心に練習されている様子が目に浮かび、明日の演奏会も楽しみです。
- ・よかった。あしたも期待しています（新潟県妙高市）。
- ・久しぶりに日本語でバッハの曲を歌うことが出来ました。幸せな思いでした（新潟県妙高市）。

(2) コンサート “湖畔でバッハ” —第42回神山教会特別演奏会—

[日時] 8月5日（土）16：00-17：30

[会場] 国際村神山教会（NLAオーディトリウム）

[曲目]

- 1) カンタータ第187番《待ち望むみななれを》BWV187
- 2) ピアノ独奏《最愛の兄に寄せるカプリッチョ》BWV992
- 3) 《ロ短調ミサ曲》BWV 232 より抜粋：〈キリエ（第2）〉、〈グローリア〉、〈地に平和〉、〈肉をとりて〉、〈十字架に〉、〈主は甦りたもう〉、〈平和をわれらに〉
- 4) アンコール（聴衆とともに）：〈平和をわれらに〉

[演奏]

ソプラノ独唱：二瓶舞子、バリトン独唱：山本悠尋

ピアノ伴奏/独奏：鈴木真帆

合唱：東京バッハ合唱団

指揮/訳詞：大村恵美子（東京バッハ合唱団主宰者）

[司会進行] 加藤剛男、[ナレーション] 室田千晶 (BWV992)

[参加人数] 76名（配布資料残数より推計）

[アンケート回答数] 21通。

■この企画を何でお知りになりましたか？

ポスター	5	NLA 内の掲示板(4)
チラシ	6	
新聞・雑誌	2	
団からのDM	1	
団のHP		
その他	9	知人の紹介(6)、WSに参加して、NLA カレンダー

■どちらからお越しですか？

地元在住		
県内の他市町	2	
他府県	6	新潟(2)、神奈川(2) 宮城、兵庫、東京、滋賀
避暑で滞在中	13	NLA 国際村内、野尻大学村
その他		

■ご来場の交通手段は？

徒歩	7	
自家用車	9	
路線バス	1	
鉄道		
送迎マイクロバス	1	
その他	1	友人のクルマ

■ご意見・ご感想をお聞かせください。

- ・ありがとうございます。来年も楽しみにしています。
- ・どうもありがとうございました。NLAのピアノで大変だったのではないかと思います（東京都練馬区）。

- ・すてき！！
- ・大村先生 素晴らしい！！（東京都日野市）
- ・とてもすばらしかったです！ありがとうございました！来年も楽しみにしています！
- ・初めて聞きました。
- ・すばらしかったです♪

・はじめてバッハを日本語でできました。とつきやすく聞かせてもらいました。ただ、ミサ曲はグローリアに関してはもう少し訳がほしいか。

- ・豊かな合唱の声に心が動きました。このピアノ曲は初めてでした。バッハのウィットを感じます。楽しい、豊かな演奏をありがとうございました。
- ・50 数年にわたり活動されており、すばらしいと感じました。夏休みに思わぬ贈り物をいただきました。ありがとうございました（東京都品川区）。
- ・バッハの曲を分かりやすく、親しみやすく紹介して頂いて楽しいひとときでした。最後の合唱は、参加できて、曲に対してより親しみがわきました。
- ・素晴らしかったです。心が洗われました。11 月楽しみです（東京都中野区）。
- ・いつもありがとうございます。
- ・日本語は分かりやすくてすばらしい。
- ・洗練された美しいソロと合唱を聞かせてくださり、ありがとうございました。ロ短調ミサ、素晴らしかったです。日本語による演奏、大変興味深かったです。
- ・日本語で聞くと、また違った味わいがありますね。最後、一緒に歌え、楽しかったです。

BACH-CHOR, TOKYO 野尻湖 2017
KAMIYAMA CHURCH SPECIAL CONCERT #42
Bach's Music on the Shore
■4:00 PM Sat. August 5, 2017
■Auditorium, Nojiri Lake Association



PROGRAM
— Performance in Japanese Version Translated by Ohmura Emiko —

- Cantata
“Here look now all men to thee” BWV 187
- Piano Solo
“Capriccio on the Departure of his Beloved Brother” BWV 992
- Chorus Music from
“Mass in B-minor” BWV 232
No.3 “Kyrie eleison”
No.4a, b “Gloria to God in the highest”, “On earth peace to people of good will”
No.13 “And by the Holy Spirit was incarnate of the Virgin Mary”
No.14 “For our sake he was crucified” No.15 “And rose again on the third day”
No.23 “Grant us peace”


NIHEI Maiko
Soprano


YAMAMOTO Yukihiko
Baritone


SUZUKI Maho
Piano


OHMURA Emiko
Conducting

■Admission Free
BACH-CHOR, TOKYO
東京バッハ合唱団
office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

■ 国際村（NLA）内には、英文ポスターも貼られた。



■ 8/5 野尻湖特別演奏会 “湖畔でバッハ” のリハーサルを終えて、中央前列、山本悠尋さん（膝に手をあてて前かがみ）、その右へ二瓶舞子さん、主宰者、鈴木真帆さんの諸先生、その右、ピアノの譜めくりをお引き受けいただいた後援会員の原田知子さん（黒服でしゃがんでいる）、背景が古い木造の神山教会。